第 29 回日本臨床救急医学会総会・学術集会　参加報告

札幌東徳洲会病院　舟橋 慶将

2026 年 7 月 16 日~18 日にかけて大阪国際会議場にて第 29 回日本臨床救急医学会総会・学術集会が開催され参加してきましたのでご報告させていただきます。

日本臨床救急医学会は、救急医療に携わるさまざまな職種が参加する学会で、今回は約 3,800 名もの医療関係者が参加されました。今回のテーマは「探そう・救急医療の 3 拍子―原点から現点。そして頂点へ―」。

7 月の大阪開催ということで、会場ではクールビズが推奨されていました。比較的涼しかった札幌から伊丹空港に到着すると最高気温は 36.4℃。湿度も高く、歩いているだけで汗が吹き出してくるほどの暑さでした。会場でも、発表者を含めクールビズで参加されている方が多く、「北海道の夏とは違うな」と、到着早々に大阪の暑さを実感しました。

開催された 3 日間では、会場では救急医療の基礎を学ぶ講座から、最新の装置・システム・技術を活用した救急診療の報告まで、非常に幅広い内容が取り上げられていました。また、多職種が同じステージに立って議論するパネルディスカッションも多く、救急医療が一つの職種だけでは成り立たないことを改めて感じる学会でした。

特に今回、私が特に印象に残ったのは「STAT 画像所見報告」についてのパネルディスカッションでした。「STAT 画像所見報告の目指すところ」と題して、救急医、診療放射線技師それぞれの立場から、STAT 画像所見報告の現状や今後について活発な議論が行われました。

救急医が求める STAT 画像所見報告は、救急現場において、1 人の救急医が多くの患者さんを同時に診療せざるをいけない場面の中で、画像上の「落とし穴」となる所見を見逃してしまう可能性があります。特に夜間や休日は放射線科医が常時読影できない施設も多く、画像を撮影する我々診療放射線技師が異常に気づき、医師へ情報を伝えることが診断の一助となるというお話でした。

その中で特に印象に残ったのが、「間違いを恐れず、気になる所見があればどんどん伝えて

ほしい」という救急医からのメッセージでした。STAT 画像所見報告というと、診療放射線技師が画像を「診断」することのように捉えてしまい、報告することに心理的なハードルを感じることもあると思います。しかし、あくまで画像上の気になる所見を伝え、医師と共に確認することが重要であり、その一言が患者さんの治療開始を早める可能性があるということを改めて認識しました。

また、各施設からの報告では、STAT 画像所見報告を個人の技量だけに頼るのではなく、組織として継続できる仕組みを構築していることが印象的でした。報告対象となる疾患の RIS や電子カルテへの記載方法を明確化させ、症例検討会や勉強会を行い、報告後に読影レポートと照合してフィードバックを行うことで、日々の経験を次の報告につなげていく取り組みは非常に参考になりました。

日々の「フィードバック」の重要性を改めて感じたのが、救急撮影認定技師の指定講習会です。「臨床に活かす救急画像所見クイズ―見落としを防ぐための視点とアプローチ―」という講習では、実際の画像を用いて救急画像を読む際の視点やアプローチについて学びました。講習内では画像所見に関するクイズも行われ、全問正解者はわずか 1 名でした。その方が、普段から「気になった画像については、必ず後から読影レポートを見返して答え合わせをしている」と話されていたことがとても印象に残っています。自分自身、日々の業務の忙しさを言い訳に、最近では画像の見返しが疎かになってきているなと反省すると同時に、自分が撮影した画像について、診断結果を確認し、自分の判断と答え合わせをする。この繰り返しが、画像を見る力を少しずつ高めていくのだと改めて感じました。

一方で、救急画像診断の「これから」を感じる機会もありました。その一つが、Canon のランチョンセミナーで紹介された AI を用いた画像診断です。

講演では、大阪急性期・総合医療センターで救急医としても勤務されている株式会社 fcuro 代表の岡田先生から、外傷患者の CT 撮影後に出血部位の特定を支援する AI 技術「ERATS」について紹介がありました。ERATS は AI が診断を完結させるものではなく、画像上の異常が疑われる部位を赤い波のような表示で示すことで、医師が確認すべき場所を見つけやすくするというものです。

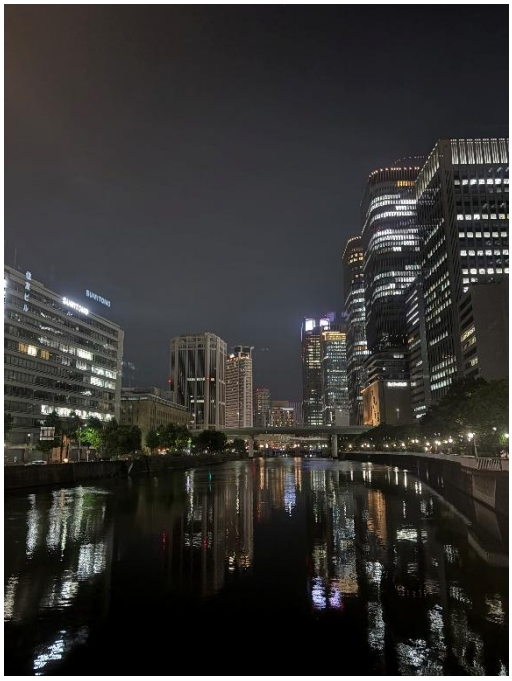
講演で印象に残ったのは、AI に診断をすべて任せるのではなく、異常が疑われる部位を赤い波で表示することで、最終的には救急医自身が画像を見て判断する工程をあえて残しているということです。AI によって確認すべき部位を絞り込むことで画像を確認する時間を短縮しながら、最終的な判断は人が行う。AI を「診断の代わり」としてではなく、「人の

判断を助ける道具」として活用するという考え方に、とても共感しました。

これからAI画像診断がさらに進歩した時のSTAT画像報告のあり方を考える機会となりました。技術は進歩しても、画像を見て考え、臨床と結びつけて判断する作業は、これからも重要なのだと感じました。

今回の学会を通して、救急医療における診療放射線技師の役割について改めて考えることができました。撮影して終わりではなく、その画像から必要な情報をいかに早く取り出し、診断や治療につなげるかが重要あり、「速く撮る」「きれいに撮る」だけではなく、患者さんの状態や臨床の流れを理解し、今どのような画像や情報が求められているのかを考えることが、より一層求められているのではないかと感じました。

救急医療に少しでも貢献できるよう、今回学んだことを日々の業務に活かしていきたいと思います。



大阪の夜景



特別講演の橋本徹氏(写真掲載本人許可有)